

交流

〈大会発表要旨〉

◆橋本陽介 中国語連体修飾的的の通時的研究

中国語はSVO語順の言語であるが、連体節を含めた修飾語が前置されるといって知られている。確かに中国語では、文を複雑化させる際に、**“連体節的の名詞”**の形を取るため、複雑な連体節が名詞の前に置かれている。しかし実際には、**“連体節的の名詞”**の構造の「連体節」の部分に複雑な構造が取られるようになったのは、主に二十世紀以降であり、外国語の翻訳の影響によるとみられる。現在でも、長い連体節は文法上可能になっているものの、修辭的には好まれない。その代わりに、流水文の形式が使用され、意味的に修飾成分を担うものが後置されている。

“連体節的の名詞”の修飾部分が複雑になったものは、外国語の翻訳に

よって産れたとしばしば指摘はあるものの、実際のところ五四時期以降とそれ以前で、どの程度の違いがあるのかははっきりしていない。そこで本発表では、五四時期以前の**“的”**を使った連体節の構造を見、どの程度**“複雑(単純)”**だったのかを確認した。そのうえで、五四時期の連体**“的”**がどのように使われたのかを見た。

◆和田英信 李白テクストの揺らぎ

李白の作品には「揺らぎ」が多い。まずは集に示される少なからぬ文字の異同。その文字の異同のなかには、作品が李白の手もとにあった時に由来する「揺らぎ」も含まれるものと想像される。そして、かかる文字の「揺らぎ」は、いずれが李白の真であったかという議論に読者を導く。李白の真を求める読者の思いは、李白詩の「真偽」をめぐる議論の多さにもつながる。このほか李白詩には、

読者の読みが新たなテクストを生成したと思しき事例も見る事ができる。本発表では、李白詩の「揺らぎ」に目をとめて、古典中国の文学の場において詩を

むことの意味と、李白詩の特色を再考した。(本発表をまとめた論文は『中国の詩学』を超えて―川合康三先生喜寿記念論集』研文出版、二〇二四年、に掲載)

◆鄭瑞雪 江戸期における徐渭詠雪の受容と変容

明の徐渭(一五二一―一五九三)が詠んだ長篇詠雪七言排律「次夕降薄雪、徑滿鵝鴨卵、余睡而復起、燒竹照之八十韻」(『徐文長文集』卷九、以下「徐渭詠雪」と略記)は、中国ではその後ほとんど影響を及ぼさなかった。しかし、江戸時代に日本へ伝来した後、特に重要視されるようになった。

本発表では、「徐渭詠雪」とその江戸時代における模倣作である、江戸中期の梁田蛻巖(一六七二―一七五七)による「詠雪並序」(『蛻巖集』卷三、以下「蛻巖詠雪」と略記)、および江戸末期の大沼枕山(一八一八―一八九一)による「詠雪詩」(『熈々堂叢詩』、以下「枕山詠雪」と略記)を研究対象とする。音韻と詩語の二つの側面から、「徐渭詠雪」が江戸

期においてどのように受容され、変容させられたのかを考察するとともに、三作に見られる禁体詩への探索意識について検討する。

音韻の面では、「蛻巖詠雪」と「枕山詠雪」は「徐渭詠雪」の出韻や反則といった問題点を受け入れつつも、險韻の使用や長韻の体裁を通じて禁体詩への挑戦意識を示している。また、詩語の面では、「蛻巖詠雪」と「枕山詠雪」において「徐渭詠雪」から念入りに改造された詩語が見られ、それらが禁体詩からの影響を受けていることが確認できる。

本発表の内容は、発表者が執筆中の修士論文「日本における禁体詩の規範の変容―『蛻巖詠雪』と『枕山詠雪』を通して』の一部を成すものである。

◆董子華 「行旅」の空間とその変遷―宋・斉・梁の詩を中心にして

本発表では、宋・斉・梁の行旅詩における空間について考察した。行旅詩は六朝時期に多作され、『文選』にも一つの部類として収載されている。中国古典詩の系統において、「行旅」は一般的な旅

ではなく、官吏の転任に伴い、本来あるべき場所を離れて異郷に赴く旅に特定されている。行旅詩の中には旅人の思いが屢々現れているが、行旅の定義から、旅をすることは作者の自発の行動と言えず、また一人で行動することも考えにくい。行旅詩は詩人の個人的営為と官吏としての身分が共同作業した産物であると考えて良い。創作目的と内容から見れば、作者たちは自らの公的な役割、即ち官吏としての身分に対して自覚を持っているが、文学的加工によって文学者としての個人的な感覚を行旅詩の空間に投影している。全体的に見れば、宋から梁への行旅詩における空間は次第に概念的で平面な型作りを脱却し、目に映る景物と広がる作者の心象風景の融合によって、より繊細に具現されていると考えられる。

◆趙美子 江戸後期における杜甫詩の評価と受容

本発表は江戸後期の漢詩と詩話に見え杜甫にかかわる内容をめぐって、杜甫詩に対する評価と受容を討論した。明の

前後七子から伝来した復古的な思想に反発し、宋詩を唱えて袁宏道らの性靈派に賛成するのはこの時代の風潮であるが、杜甫を重視する詩人も多くいた。ただ、杜甫を学ぶことが宋詩を読む目的だと言う積六如の主張に対し、山本北山は杜詩を読むことは清新の詩を作るためだと主張している。それぞれの目的が異なるが、杜甫を尊重する気持ちは共通している。江戸後期の詩話では、杜詩を詩句・詩語・格律などの各方面から考察している。特に杜甫を褒め称える一般的な評価のほか、やや非難の意味を含める内容も見える。同時代の漢詩にも杜甫を詠う詩や、杜甫からの典故と表現を用いる詩がかなりあり、杜詩受容の状況を示している。これらは江戸漢詩の研究だけではなく、杜甫の研究としても非常に貴重な資料である。

◆閻瑜 中島端・中島疎・中島比多吉と近代中国 ―資料から読み取る中島敦の伯父と叔父の仕事―

中島敦（一九〇九―一九四二）は、西洋文学から中国古典へと関心を移し、

「山月記」や「李陵」などの名作を生み

出すとともに、近代中国を舞台とした「北方行」も執筆した。この背景には、中国に長期間滞在し、広範な交友関係を築いた伯父・端（一八五九〜一九三〇）、

疎（一八六一〜一九四〇）、および叔父・比多吉（一八七六〜一九四八）の影響が大きいと考えられる。

しかし、先行研究では、端、疎および比多吉と近代中国との関わりに関する調査は十分とはいえず、彼らが中国文人と築いた交友関係や、それが日中両国の社会や文壇に与えた影響については未解明な点が多い。本発表では、手書き原稿、当時の新聞・雑誌、書籍などの一次資料を用いて、端、疎および比多吉が中国人と築いた交友関係と、その文化交流が日中両国に及ぼした影響について考察した。また、それが中島敦の思想や作品創作にどのように影響を与えたのかについても検討を行った。

（修士論文要旨）

◆鄭瑞雪 日本における禁体詩の規範の変容―「蛻巖詠雪」と「枕山詠雪」を通して―

本論文では、日本江戸時代に作られた二つの禁体詩、梁田蛻巖の「詠雪並序」（『蛻巖集』巻三、以下「蛻巖詠雪」と大沼枕山の「詠雪詩」（『熙々堂叢詩』以下「枕山詠雪」）を中心に考察する。また、それらの模倣対象として、明の徐渭による「次夕搏降雪 徑滿鵝鴨卵。余睡而復起燒竹照之八十韻」（『徐文長文集』巻九、以下「徐渭詠雪」）を参照し、日本における禁体詩の規範変容、その原因と意義を明らかにすることを目的とする。

第一章では、禁体詩の本質である「景色表現の抑制」と規範との関係を明確にし、「蛻巖詠雪」と「枕山詠雪」が禁体詩であることを確認した。第二章では、語義や音韻の分析を通じ、禁字や雪に関する意象の使用、出韻や反則といった規範変容を明らかにした。第三章では、規範変容の原因として「白戦空拳」の解釈

差や江戸時代における漢詩音韻の緩やかさを指摘した。また、その意義として、創作自由の拡大と詠物手法の革新という二点を挙げた。

◆林雨璐 文学の空間理論への一補足―周瘦鵬の影戯小説を中心に―

本稿では、一つの影戯に基づいて創作された二篇の小説―周瘦鵬の「嗚呼……戦」と包天笑「情空」―との比較分析を通じ、一つの映画に対する異なる言語表現の問題を検討する。また、周瘦鵬の影戯小説「龐貝城之末日」とその影戯原作 *the last days in pompeii* の空間表現と空間構造の比較分析を通じ、映画から言語へ転換する際の空間構造の相違を分析する。

第一章では、ここまでの文学における空間理論をまとめ、未解決の問題を抽出する。第二章では、映画の中国伝来、影戯小説の発展を考察する。研究対象を明らかにする。第三章では、小説の冒頭とシーンのつながりに焦点を当てて分析を行う。「嗚呼……戦」は「情空」とは異なる独特な空間構造を持って、特に物語

展開において時間よりも空間を重視している。第四章では、影戯小説と影戯原作の比較を通じ、影戯の空間構造はランダムで、分散的な特性に対し、小説の空間構造は階層性と包摂性があるという結論が付けられている。これらの分析を通

編集をお手伝いしていた際大失態をおかした私と一緒に、矢嶋先生は「後輩が申し訳ございません」と頭を下げてくださった。今思い返しても恐縮至極、恥じるばかりだ。

じ、「映画の空間が時間的な言語テクストに転換される問題」に対する一つの解答を提示する。

圧倒的エネルギーをお持ちでありながら情に篤く、周囲への気遣いも忘れぬ優しいお人柄だった。矢嶋先生へ深く感謝申し上げ衷心よりご冥福をお祈りする。

〈近況報告等〉

◆戸高留美子 矢嶋先生を偲ぶ

矢嶋先生は一九七五年本学にて修士号を、一九九八年に博士号を取得された(学位取得論文…「庾信研究―恥意識と修辞の特色について」)。その間も庾信を中心にご研究に邁進し、多くの論文と著書を発表された。翻訳、解説書などを含め国内外の別なく業績をあわせると枚挙に遑がない。また学術振興に大きな貢献をする一方亜細亜大学教養学部で公務と研究指導に従事された。

私は個人的にも大変お世話になった。亜細亜大学非常勤講師として勤務していた私の夫もまた然り。『六朝学術学云報』